

“今ドキ”の保護者への「子育て(の)支援」って？

わたし、会社でママ・パパの会のグループを持ってまして。。笑／なにやっつてんだろ、あたすい。／すでに40人くらいいるんです。／何をしているかというところ、お子さんの年齢別にグループにしてランチを一緒にしてるの。／最近パパも入って来てくれてとても素敵なランチ会になってます。／みんなで情報の交換をしたり、失敗談だったり成功談だったり、皆さんとても喜んでくれていて、ボランティア企画者としてはとてもうれいんです。／(中略) ちよつと前の話になります。が、…略：会社に大妻女子大学の岡先生が講演に来てくださいました。／タイトルは「子供を育てるおやぢから」。／興味ありますよね。このタイトルにすぐ飛びつき、わたしの持つてるネットワークのママパパにもすぐ連絡しました。／そこで心に残ったことがたくさんあるんです。是非、子育て中のママパパにはシェアさせていただきたいので書かせてください。

「子供達と歩くときに引つ張ってませんか、親御さんたち」

はっ！って気づきますよね？ 何となく、早く行かなきゃみたいな気になって引つ張ってしまっているこの都会の女。わたし！ 笑

心に余裕がないのかって一瞬のうちに考えさせられた一言。

子供達を先に歩かせてあげてくださいって。

子供の目線で歩くことで大人が発見することがたくさんあるんですって。

目的の地まで行くのに時間がかかるかもしれない、または目的の地に到着できないかもしれない、でも、それでもいいんですって。

はっつきり言ってくれました。

わたしたち大人は目的の地に到着することに気を引かれすぎて思わずこともたちを引つ張って連れて行ってしまふ。(以下、略。http://ameblo.jp/ciggy/entry-11731747015.html)

これは、先日ある大手証券会社の方からの依頼で、社員向けに「健康・育児・介護」をテーマに社員が個々に仕事と人生の充実がはかれるよう、企画されたイベントで「散歩」について話した部分に対する参観者のブログ記事である。この方と会が終わって話をした訳ではない。

でも、「心に余裕がないのかって一瞬のうちに考えさせられた」。こう書いて下さった参観者の人がいらしたことに素朴に感謝したい。なぜならば、保育(者)が保育という営みにおいて大切にしたいことをその方は感じ取ってくれた、と私には思われてならないからだ。

子育てとは本来、子どもに限りない愛情を注ぎ、その存在に感謝し、日々成長する子どもの姿に感動して、親も親として成長していくという大きな喜びや生きがいをもたらす尊い営みである。

したがって、子ども・子育て支援とは、保護者の育児を肩代わりするものではなく、保護者が子育てについての責任を果たすことや、子育ての権利を享受することが可能となるよう、地域や社会が保護者に寄り添い、子育てに対する負担や不安、孤立感を和らげることを通じて、保護者が自己肯定感を持ちながら子どもと向き合える環境を整え、親としての成長を支援し、子育てや子どもの成長に喜びや生きがいを感じることでできるような支援をしていくことである。

平成二五年八月に示された「子ども・子育て支援法に基づく基本指針(案)」の「三. 子育てに関する理念と子ども・子育て支援の意義」に示された文章。本来「大きな喜びや生きがいをもたらす尊い営み」である「子育て」が、今、「負担や不安、孤立感」を感じる営みになっているという。なぜか。

前述のブログに示された「心に余裕がないのかって一瞬のうちに考えさせられ」るのはなぜか。また「わたしたち大人は目的の地に到着することに気を引かれすぎて思わずこともたちを引つ張って連れて行ってしまふ」のはなぜだろうか。そのことをまずは考えてみたい。

「時間意識」としての子ども

教育哲学者の矢野智司は、「子ども」という観念が「時間意識」であることを指摘している(『子どもという思想』、玉川出版会、一九九五)。曲解を恐れず、氏の論に対する私の理解を述べればそれは次の通りである。

「子ども」は、実は机や椅子、帽子や靴下といったコトバと同じように、指示対象を明示することが出来ない。例えば、十八歳の大学生に「あなたは子どもか大人か」と問うてみれば、彼・彼女は途方にくれる。なぜならば、未成年ということであれば子どもであろうが、多くの場合は肉体的には子どもを産むことが出来る。つまり、生物としては成体に他ならない。反対に、二二歳の大学四年生に同様の質問をすればどうなるか。既に成人。肉体的にも成体。しかし経済的には自立をしていない。そのため多くの場合、彼・彼女はやはり大人であると述べることを逡巡するのがその実際である。

「時間意識」としての「子ども」。それはいかなる意味か。矢野は言う。近代以前の人の一生は春夏秋冬になぞらえるような円環的な時間意識として捉えられてきた。それが、近代に入り誕生から死までが直線的な時間意識へと変わった。だからこそ、人々は「子ども」という観念を産出せざるを得な

つたのだ、と。

産業革命と名指される工場による大量生産・大量消費の訪れ。原材料が加工され、製品化される。こうした形で人の一生がなぞらえるようになったのである。

ちなみに、「学校」という装置も近代の産物だが、それが工場をその理念的なモデルとなっていた点は改めて述べるまでもないだろう。大量に、短時間に、不良品なく生産する工場ラインは優秀なラインに他ならない。これはそっくり、「早く」「沢山」の問題を「間違いなく」解ける子どもが「頭の良い子」として認められることと呼応している（そしてそれはまた、大人社会における「優秀な人材」もまた同じである）。

さらに言えば、原材料が製品になった段階で不良品をチェックするよりも、途中段階でチェックし、その不良品をはじき、再度加工した方が生産性はより向上することになる。これが教育や子育てに持ち込まれば、発達（課題）に他ならない。

こうして、私たちの人生は結果から常に逆算される思考に支配されることになった。効率や能率が非常に重要視されるようになる。しかしそうであるとすれば、「今」という時制は、「目的」にはなり得ず、絶えず「手段」としてしか存在できない。そうした生の虚しさや、おかしさを当時の人々は見つけ出した。「手段」のための「今」ではなく、「今」のための「今」を生きていることこそが、本来の人間のあるべき姿ではないのか。そうした意識の表れとして「子ども」という観念を産出する必要があったのだ、と矢野は指摘したのである。（ちなみに「遊び」という観念も近代の産物である。「子ども」と同様に、「遊び」もまた何かのための手段ではなく「遊び」はそれ自体が目的である、という認識がこれである）

今日、我が国の状況においては、既に指摘した「頭の良い」子どもや、「優秀」な大人、と名指される像を思い浮かべれば明らかなように、効率や能率は非常に大きな価値が付与されている。そうした中で子どもと向き合うことは、そもそも矛盾したことに他ならない。なぜならば、日常生活を手際良く、予定された結果のための逆算された現在の行為を遂行しようとする私たち行動規範そのものに、「子ども」はそもそも矛盾する観念（端的にいつてしまえば、それを邪魔する存在）に他ならないからである。

「わたしたち大人は目的地に到着することに気を引かれすぎて思わずこともたちを引っ張って連れて行ってしまふ」ことを無意識に強いられている。そんな大人にとって、「心に余裕がないのかって一瞬のうちに考えさせられるのは必然であり、負担感や不安、苛立ちを抱くのはむしろ当たり前のこととして理解できるのである（ちなみにそう考えれば、いわゆる早教育を「将

来のため」と保護者が語らずにはいられない理由も想像するに難くない）

“散歩のススメ”と子育て（の）支援

では、改めて「保護者が自己肯定感を持ちながら子どもと向き合える環境を整え、親としての成長を支援し、子育てや子どもの成長に喜びや生きがいを感じる事ができるような支援」を保育者としてどう考えれば良いのだろうか。

幼稚園はもとより学校である。しかしその教育の方法的原理が教授論ではなく援助論であることを否定する者は、現行の幼稚園教育要領に準拠する限りないだろう。とすれば、小川博久が「援助」における目標とは、基本的に子どもの育ちの指向性を読み解き大人が子どもになり代わって設定したものであることを指摘したように、『保育援助論』生活ジャーナル社、二〇〇〇、現在は萌文書林から二〇一〇に復刻されている）、その営みは子どもの「今」から始められる必要がある。

保護者は保育者ではない。保育の専門性を理解しているわけでも、またそれを保育者のように理解する必要もない。だからこそ、前述したように子育て支援を意図した講演で、私は「散歩」の話をしたのである。

かつて倉橋惣三は「うしろ向き」という「短言」の中で次のように書いた。

「わたしが子どもをじっと見るのは、その後ろ向きだ。…ただ、後ろ向きだけは、心をこめて眺めることができる」「前に回っても見たいが、目をあわせては、その無心を素すおそれもある。せめては横顔をとも思うが、いいえいいえ、そっと、しかし、じっと、うしろから眺めさせて貰っておこう。そこでは、子どもの心の動きに、ただ同じ方向のみ追隨していることも出来るのであるし」と。（『幼児の教育』第三八巻第一二号）

「子供達と歩くときに引っ張ってませんか」…。

「子どもの心の動きに、ただ同じ方向にのみ追隨していることも出来るのであるし」と倉橋が語った「うしろ向き」の意味。前に回って逆算して追われる日々から苛まれていようであるう保護者への「子育て（の）支援」求められている今だからこそ、うしろから眺めついでいくことの豊かさを、「今」に魅せられることの幸せやその意味深さを、ぜひ保護者と共有していつてほしいと願わずにはいられない。なぜならば、保育者の保育者としての幸福や専門性の基点もまた、まさにこの点にあると私には思われてならないからである。

（東京都国立幼稚園長会 会報 平成二六年三月号）